

## 釜石からの発信

平成七（一九九五）年一月十七日。兵庫県は阪神・淡路大震災に見舞われました。六千人を超える人々が亡くなり、多くの人々が被害を受けました。兵庫県では、この震災から得た教訓を生かすために、自然の脅威と生命の尊さ、共生の大切さを考える防災教育を推進してきました。その中に、先進的な活動を行う学校を顕彰する「ぼうさい甲子園」があります。この「ぼうさい甲子園」において、岩手県釜石市立釜石東中学校は、平成二十二年（二〇一〇）年、二十三年（二〇一一年）と二年連続で優秀賞を受賞しました。またこのことを通して、釜石東中学校と兵庫県立舞子高等学校との交流がはじまりました。

二度目の受賞となった平成二十三年一月から二ヶ月後、東北地方を大地震が襲いました。多くの人々が津波の犠牲者となり、死者・行方不明者は一万八千人を超えました。釜石市でも津波によって千人を超える死者・行方不明者が出ました。しかし、釜石市の小中学生は二千九百二十一人が津波から逃れました。九十九・八パーセントの生存率でした。学校にいた児童生徒だけでなく、すでに下校していた児童生徒も、多くが自分の判断で高台に避難しました。釜石東中学校は、隣接する鶴住居小学校とともに「釜石の奇跡」と報道されました。

三月十一日午後二時四十六分、約五分間にわたる激しい揺れが続いた。そのとき、釜石東中学校の一、二年生は部活動をしていた。三年生は帰宅準備をしているときだった。教頭先生が、校内放送で避難を呼びかけようとしたが、停電で放送はできない状況だった。避難訓練では、校庭に避難し、点呼をとるように決めてあった。しかし、校庭は液状化現象で泥水が噴き出し、とても点呼がとれる状態ではなかった。

部活動をしていた生徒の中には、揺れている最中から自分の意志で校庭を駆け出し、隣接する鶴住居小学校に向かって、

「津波だ。逃げるぞ！」

と叫びながら避難する者がいた。教頭先生も、

「逃げろー。走れー。点呼はとらないでいいから。」

と叫びながら生徒二百十二人と先生十六人を誘導した。校舎内にいた生徒も上履きのまま飛び出した。三百五十人の児童がいた近くの鶴住居小学校は、津波の到着が早いかもしれないと判断し、当初、大半の児童を校舎の三階に避難させていた。しかし、釜石東中学校の生徒が走るのを見た先生が、避難所に行ったほうがいいと判断し、校外への誘導を始めた。児童は一斉に校舎を飛び出し、中学生と合流して避難を始めた。

釜石東中学校では、その前年、鶴住居小学校と合同で津波の避難訓練をしていた。「遅れている小学生を助けながら逃げることを課題にし



た。津波の到達は地震発生から三十四分後と想定し、訓練開始から十五分以内に避難所（福祉施設）で整列し点呼を終えるのが目標だった。二時五十五分ごろ、あらかじめ指定されていた避難所の福祉施設にたどり着いた。訓練通りクラスごとに整列し、初めて点呼をとった。だが、大きな余震が続き、避難所の脇にある崖は崩れかけており、海へ目をやると津波が防波堤に当たって激しい水しぶきを上げている。この様子を見たある男子生徒が、

「先生ここじゃダメだ。」

と言って、さらにその先にある介護事業所へ移ることを提案した。その声を聞いて教頭先生は、

「後ろは絶対見るな！まっすぐ避難しろ！」

と大声で叫びながら消防団員と一緒に生徒たちを避難させた。後ろには大津波が迫っている。それを見てしまったら、恐怖で足がすくんで動けなくなる。「後ろは絶対見るな！」と叫びながら高台まで避難した。三年生の女子生徒は、鶴住居小学校の男子児童の手をひいて逃げた。

「大丈夫だよ。」

不安そうな男の子を励ました。自分は恐怖で後ろを振り返ることができなかった。他の生徒たちも福祉施設のお年寄りに手を貸して高台へと向かった。三時十五分ごろに介護事業所に到着した。再び点呼をしている途中、

「津波が来た！」

と、先生が叫んだ。最後尾にいた教頭先生は、

「逃げろ、止まるな。自分の命は自分で守れ！」

と大声を上げ、さらに高台へと向かった。その手前の急な坂道で、幼い子ども二人の手を引く母親に気づいた生徒が一人の子どもをおぶった。サッカー部の生徒たちは、保育所の子どもを乗せた手押し車を職員に代わって押しながら坂道を上った。三時三十分ごろ高台にある国道の石材店までたどり着いた生徒たちは町を見下ろした。町は津波にのまれ、白煙が上がっていた。釜石東中学校は三階まで浸水し、最初に避難した福祉施設も津波にさらわれていた。

三年生の男子生徒は、

「夢中で何も覚えていない。小学生と一緒に逃げたのかどうかも、記憶がない。」

別の女子生徒は、

「初め津波を見たとき、死ぬのではないかと思っただ。真面目に訓練して、いつも早く逃げるように工夫していたから、生き残れたのだと思う。」

と振り返った。



『津波でんでんこ』。東北地方の三陸沿岸部に伝わる言葉です。

「津波の時にはでんでんばらばらに、一人一人で逃げなさい。」という教えです。東北地方の三陸沿岸部では、過去繰り返し津波の被害を受けてきました。明治二十九（一八九六）年の明治三陸津波では、二万二千人もの人々が亡くなり、釜石市でも当時の人口六千五百人のうち、四千人の人々が犠牲になりました。そのなかには、母親が地震のあと必死にわが子を捜したり、祖父母を気遣って家にもどったりしたこと、津波にのみこまれていった人々も多くいたと考えられました。そうしたことを教訓に、この『津波でんでんこ』という教えが生まれました。

いざという場面で、家族への思いを振り払って一人で逃げることはできるのでしょうか。阪神・淡路大震災で当時一歳半の男の子を亡くした女性は、

「『守ってあげられなくてごめんね。ママが生きていてごめんね。』とずっと思っていた。」

と話されます。「自分の命の危険を顧みず、子どもを助けに行く」、それが親の思いなのかもしれません。だからこそ、どうすべきかを考えたいと思います。

釜石市では、平成十六（二〇〇四）年から、防災の取り組みを続けてきました。そのなかで「想定にとらわれるな」「最善をつくせ」

「率先避難者たれ」の『津波避難の三原則』を学んだといいます。一生懸命逃げる姿が周囲の命も助けるといいます。そしてその前提に、「家族もきつと逃げているはずだ。」という信頼関係を家族の中につ

くっておくことの大切さも学んだといいます。

この取り組みが東日本大震災で生かされ、釜石東中学校の生徒たちの行動へとつながりました。釜石東中学校の生徒は、自らの命を守っただけではなく、周囲にいた大人たちの命も救いました。自らの判断力や想像力で危機を乗り切った生徒たちの行動は、『釜石の奇跡』として、日本だけではなく、世界からも注目を集めています。「自分の命を守ることが、地域の人々の命を守ることにつながり、それが、自分のふるさとを守ることもつながる。」生徒たちはそんなことを証明してくれました。しかし、先生方は言います。

「わたしたちは、『奇跡』という言葉は使いません。」

県立舞子高等学校は、震災直後から募金活動を行い、四月には、先生一名と生徒二名が釜石市に向かいました。その他にも、兵庫県からは多くの小・中・高・特別支援学校生が、ボランティアとして東北地方を訪れたり、募金活動を行ったりしています。阪神・淡路大震災では全国から温かい支援が数多く寄せられ、復興への大きな力となりました。「神戸から東北へ。今度は私たちが。」を合い言葉に、交流・支援の活動は今も続いています。

「ぼうさい甲子園」を通して、阪神・淡路大震災の教訓を学んだことや、そこで生まれた交流が、釜石市の危機を乗り越える力の一つになり、復興への意欲につながっています。そして今度は、釜石市の取り組みを、兵庫県をはじめ全国の学校が学ぼうとしています。

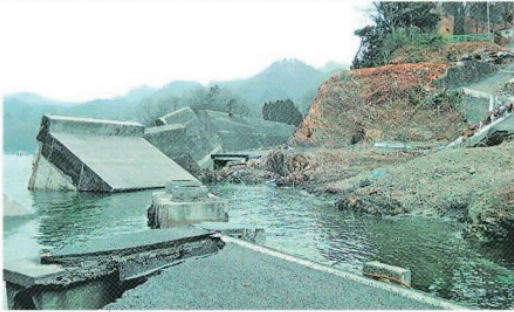


「一人じゃない。勇気もらう」

「ずっと励まし続けたい」



メールで被災地の様子を伝えた岡田茉莉花さん(左)と妹の萌衣花ちゃん



岡田さんが撮影した被災地の写真。津波で防波堤が崩れ、道路が流された。岩手県釜石市四石

# 被災地と神戸 メールで交流

東日本大震災で被災した岩手県釜石市の市立釜石東中学校3年岡田茉莉花さん(14)が、友人の兵庫県立舞子高校(神戸市垂水区)環境防災科3年の阿部美汀さん(17)に携帯電話のメールで被災地の様子や心情を伝えてきた。2人は今年1月、神戸で開催された防災学習の発表会「ほろさい甲子園」に参加して仲良くなった。「一人じゃない」と勇気もらった。「ずっと励まし続けたい」と思いを互通せる。(宮本万里子)



舞子高校環境防災科の阿部美汀さん。神戸市

3月11日、岡田さんは釜石東中の体育館でバスケットボール部の練習中、地震に襲われた。津波が迫り、「もっと高い所へ」と叫び声が飛び交う中、近くにいた小学生の手を引いて避難した。途中、津波が家々をのみ込む様子が何度も目に入る。「泣きながら逃げた。友だちと励まし合い、走って走って山を登った」。避難しながら妹の萌衣花ちゃん

## 岩手・釜石の中学生と舞子高生の阿部さん 避難所の窮状など訴え

ん(8)や父親の学さん(4)と無事を確認し合った。地震から2日後、母親の美幸さん(41)とも再会した。3月20日夕方、神戸の阿部さんの携帯に岡田さんからメールが届いた。「家半分と車が流れましたが無事です」。その日、夜には被災した釜石の写真が送られてきた。「よかった。ずっと安否が気になっていた岡田さんからのメールに、阿部さんは涙が止まらなかった。「物資は届いていますか」と返信すると被災地の様子をうつったメールが送られてきた。「避難所では胃腸炎や感染症がはやっていきます」「窃盗も起きています」以来、2人のメールのやりとりは30回近くになる。岡田さんはかせをこじらせ、いったん青森県八戸市の父の実家に移ったが、学校再開が決まったため今月下旬、再び避難所に戻る。「1月に見た神戸のきれいな街が忘れられない。釜石も活気のある町に復興できるよう、みんなで助け合っていきたい」と岡田さん。阿部さんは「これからも応援し続け、早く萌衣花ちゃんに会いに行きたい」と話している。

神戸新聞 2011(平成24)年4月9日(土)

### 避難訓練 要援護者の方と共に

災害時に自力で避難することが難しい要援護者に対する避難計画の作成が全国の市町村の課題になっています。そのような中で、そうしたことへの取り組みをいち早く行っている中学校が、兵庫県内にもあります。南あわじ市立南淡中学校もそのひとつです。

同校は、学期に一回のペースで防災訓練を行い、平成二十五年三月には、「災害時に自力避難が困難な人たちをどのように手助けするか」をテーマに防災訓練を行いました。講師に市の社会福祉協議会の職員を招き、高齢者や障害者のほか、妊婦や傷病者らに対する避難の手助けについて学びました。講師は、「自らが助ける側という認識を持ち、何ができるかを考えて行動する。」ということを強調され、耳や目、肢体など要援護者の自由でない状態に応じ、避難誘導のコツを解説されました。目の不自由な人については、「声をかけた上で、半歩前をゆっくり進む。」などと具体的な話が

ありました。その後、生徒たちが、避難誘導を体験しました。生徒の一人は、「段差がある場所や高さを的確に伝えるのが難しかった。」と振り返りなど、真剣に訓練に取り組みました。

